

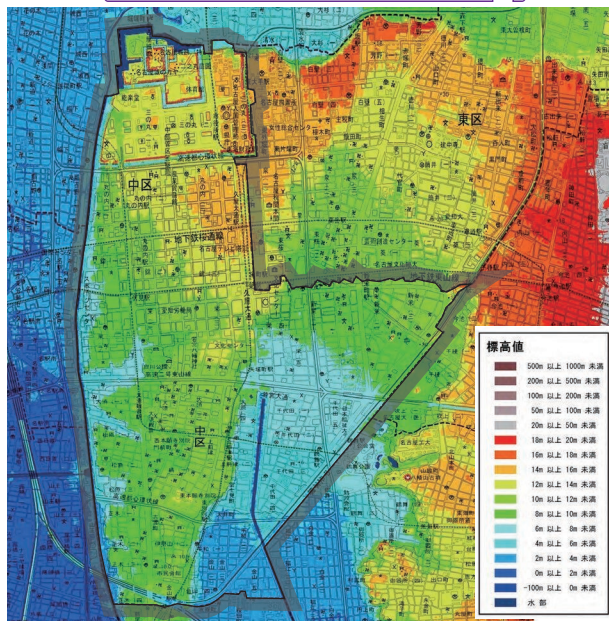


中区は どんなまち？

尾府名古屋図

1 中区は災害リスクが比較的小さいまち

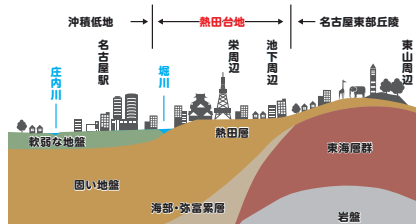
中区のデジタル標高地形図



出典:国土地理院のデジタル標高地形図に加筆

中区は、細長い半島状の地形である熱田台地にあります。

熱田台地の南西縁の崖下には沖積低地が広がっていて、江戸時代まで海が入り込んでいました。軟弱地盤が多い沖積低地に比べ、熱田台地ははるかに地盤条件が良い場所です。



名古屋の地盤のイメージ

堀川は人工河川

名古屋市ほぼ中心部を南北に流れる堀川は、1610年の名古屋城の築城に合わせて開削された人工の川です。熱田台地の西に沿って掘られ、当時海に面していた熱田と名古屋城下を結んでいます。

当初は、源流を持たなかった堀川の水は海水でしたが、1663年に名古屋城のお堀に水をひくため、御用水が掘られ、庄内川から取った水がお堀に入るようになり、堀川に庄内川の水が流れるようになりました。

広小路のはじまりは防災

1660(万治3)年に万治の大火が起こり、城下町の碁盤割の大部分が焼失しました。そこで、火災を遮断する防火帯とするため、長者町～久屋町までの堀切筋を、それまでの幅3間(約5.4m)から15間(約27m)に拡幅し、広い路として広小路の名がつけられました。

広小路は防火帯の役割があるから、あんなに広い道路なのね。



久屋大通公園 広域避難場所

名古屋城は熱田台地の上にあり

名古屋城は熱田台地の北西の端に築られました。当時、台地の北端と周辺の低地の間には10mほどの崖がありました。名古屋城からは岐阜県の関が原方面まで見通すことができ、さらにその外側を庄内川と木曽川が流れ、二重三重の防御線を形成していました。

名古屋城は台地の上にあり、水害の心配がありません。

城下町は碁盤割

名古屋の城下町は碁盤の目のように区画され、現在のまちづくりの原型となっています。

名古屋城の築城に伴い、「清須越」と呼ばれる大規模な引っ越しが行われ、武家、町家、寺社、橋梁に至るまで、それまでの城下町である清須のまちのすべてが名古屋に移されました。

当時の碁盤割のまちは、城の近くに大きな武家屋敷、外堀から南は商家や寺社を配置。さらに外側には小さな武家や大きな寺社を置き、有事に備えていました。

2 100m道路は防災エリア

中区は、細長い半島状の地形である熱田台地にあります。熱田台地の南西縁の崖下には沖積低地が広がっていて、江戸時代まで海が入り込んでいました。軟弱地盤が多い沖積低地に比べ、熱田台地ははるかに地盤条件が良い場所です。